

運動会における表現遊びの実践

—身体表現遊び「あした 天気にな～れ」の構成内容の検討—

遠藤 晶*, 花木 沙織**

* (武庫川女子大学文学部教育学科)

** (プール学院大学短期大学部)

A Practice of Body Expression Activities in Athletic Festival of Kindergarten.

— Considering Contents of the Work, “Wish Fine Day Tomorrow” —

Aki Endo * · Saori Hanaki **

* *Department of Education, School of Letters*

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

** *Department of Early Childhood Education,*

Poole Gakuin University, Sakai 590-0114, Japan

Abstract

It is the most important for little children that using their whole bodies, they imitate something and express freely their selves with various kinds of rhythm.

We continue to create works of body expression and introduce those to teachers in a nursery school or a kindergarten. So we should know how they put the work into practice and consider what factors give little children good effects through enjoying body expression.

We give a concrete example for discussion. We created a work, “Wish fine day tomorrow”, for which we got the idea from daily children lives.

Little 62 children, four years old, could be enjoying our work in the athletic festival of their kindergarten. We could see, by cooperation of the kindergarten, how they performed it as their own expressions and what influences they could have in their daily lives after their experiences.

Then, we consider teaching materials of body expression and how to teach them.

1. はじめに

人間関係の構築の困難さ、自己表現のしにくい子どもたちの育ちなどに触れるにつけ、乳幼児期からの子ども自身の身体を通して他者とかかわる体験について問う必要を感じる。幼児教育のなかでは、リズムに合わせて身体を動かす体験や動きを模倣する体験など、身体を通して表現することを大切にしてきたが、こうした遊びを通して、他者との関わりを積み重ねることの重要性を確認したい。

幼稚園・保育所において身体のあり方が確認される機会として、日常の保育のなかでの身体表現の活動や、運動会などの行事を通して身体を使って表現する活動がある。運動会は日常の運動体験を発表する場としてだけでなく、園と家庭生活とのあいだで連続的な遊びに広がる新たな遊びを獲得するなど(増原・

川村, 2003)¹⁾新たな運動の経験を蓄積していく機会となる。運動会は園生活のなかで重要な行事として位置づけられ、毎年ほとんどの幼稚園保育所でおこなわれている。保育者の工夫によって内容が構成されているが、子どもにとって無理なく取り組める教材の選択については、保育者にとっては大きな課題でもある。

筆者らは、新リズム表現研究会として身体表現活動を支えるための原本となる教材作りを継続し、保育者等対象に紹介してきた(2005 遠藤・花木)²⁾。教材作品を講習会にて紹介し、現場の保育者や養成校の教員らと情報交換を行い、教材の指導方法等について検討してきている。幼児の発達を考慮し作成した作品の作り手として、紹介した作品が実際に保育でどのように活用されているかを知り、作品構成の有効性について検討したいと考える。

日常の子どもの身近な生活をヒントに運動会で活用できる教材として創作した作品が、運動会の場で実際にどのように「表現遊び」として活用されているのか、また、日常の生活のなかでどのような広がりがあったかを、保育の実践協力園を得て、幼児を対象とした表現遊びの指導内容・指導方法について検討する。

2. 表現遊び「あした 天気にな～れ」について

(1) 作品の構成・内容

表現遊び「あした 天気にな～れ」は、①言葉をイメージしながら思い思いの動きで表現する部分と、一緒に踊る楽しさを味わうリズムダンスが含まれる、②全身をつかって表現し、身体の部分を意識化できる、③一人一人の表現だけでなく、友だちと協力して一緒に表現することを楽しめる、④子どもたちの日常生活における思いを作品のなかで再現することができる、⑤人の前で発表する体験となる運動会などで園庭を利用した身体表現の発表の素材になりうる、という点に重点をおいて、年少児にもわかりやすく、楽しんで参加できる表現遊びとして考案した。

作品の前半部分は、お弁当の材料を表現し、後半は晴れてほしいという願いをテルテルボウズにこめるという場面で、一緒に踊る楽しさを味わうリズムダンスで表現する。前半と後半をつなぐ中間部分は、雨が降ってきたら楽しみにしている遠足のお弁当を持っていけなくなるので、雨が降らないようにテルテルボウズにお願いしようという部分である。具体的内容は、Fig. 1 に示した。

表現遊びの構成、内容、楽曲、動きの表現などについては、筆者らが所属している新リズム表現研究会で討議しながら考案し、2005年7月30日、大阪市立中体育館にて、幼稚園の教諭・保育士等の約150名の参加を得て指導者実技講習会において紹介した。

(2) 実践研究の方法

講習会に参加した保育者の1名が勤務するK市の公立K幼稚園年少クラスにて、2005年9月上旬～下旬にかけて実践協力を得た。対象のクラスは2年保育の年少4歳児クラスで、もも組、ばら組、各31人在籍する。9月18日の運動会当日は2クラス合同で作品を演じた。

運動会の表現遊びの実際の様子や、運動会前後の保育実践についての聞き取りを行ない、運動会当日は筆者がVTRによる記録を行った。

3. 4歳児を対象とした運動会での「あした 天気にな～れ」の構成内容

K幼稚園で行われた「あした 天気にな～れ」の使用楽曲は原案作品と同じものが使用され、展開の内容についても原案に近い形で構成された。運動会での表現遊びとして、いくつかのアレンジが加えられており、この内容を検討することにより、4歳児の表現遊びの特性を知る手がかりになると考えた。そこで、K幼稚園で行われた「あした 天気にな～れ」の内容構成について検討する(Table 1)。

(1) 作品の原案をもとにアレンジされた内容

作品の原案をもとにアレンジされた内容は、①作品原案のストーリーを短くする、②原案のこぼれを用いながら、短いこぼれでテンポよくする、③個としての表現を十分に楽しむ、という点があげられる。具

ナレーション「あしたはえんそくです お弁当何がいいかな～？」(音楽①：COCG-6545)

●お弁当をつくろう

<おにぎり>

ナレーション「あつあつのごはん, お塩をばっぱつ. 三角おにぎり, ぎゅ. まーるいおにぎり, ぎゅ. 大きなおにぎりつくりますよ. 近くのひとつとグループになって, ぎゅっぎゅっぎゅう～. 中に何をいれようかな.」

*ひとりで, 三角おにぎり・丸いおにぎりになる.

*二人組み～四人組みでおおきなおにぎりになる.

<たまごやき>

ナレーション「たまごをわりますよ. コンコン パカッ つるるん. 今度はまぜますよ. シヤカシヤカシヤカ. フライパンがあつくなってきたよ, たまごをいれて, ジュ～. たまごが焼けてきた, まきますよ. まきまきまき～」

*たまごを割ると中からたまごが流れ出る.

*たまごを混ぜる

*フライパンに流しこむ

*焼けてくる

*巻く

<その他のお弁当の素材>

ナレーション「他に何をいれようかな.」

「エビフライ, しっぽがピン.」

「たこソーセージ, によろん によろん」

「ほうれんそう, も～りも～り」

「ながーい きゅうり」

「プチトマト, プチプチプチ」

「最後はウサギリんご.」

●お弁当箱に入れますよ

おにぎり・たまごやき・エビフライ・たこソーセージ・ほうれんそう・プチトマト・ウサギリんごになって, 順番にお弁当箱に入っていく

●あれ, お空が暗くなってきたよ(音楽②：PCCY-0118)

ナレーション「あれ お空が暗くなってきたよ あめかな～」

*空を見上げながら不安げな表情 不安げな身振り

●あした 天気にな～れ(音楽③：CMP9271)

*小さなテルテルポーズを手に, 円になって集まる

かけあし

わーい わーい(腕を大きく回す)

右手をひらり 左手をひらり

ゆれて ゆれて

右手をグーにして胸をたたいて 右腕を伸ばし 親指を立てる(おまかせポーズ)

ナレーション「晴れてよかったね」

Fig. 1. 表現遊び『あした 天気にな～れ』の構成原案

Table 1. K幼稚園での「あした 天気にな〜れ」の内容と構成

作品の流れ	ナレーションおよび楽曲	子どもの表現	保育者(クラス担任)の動きの援助
入場	「あした天気にな〜れ」のお話より, 表現します。 明日は遠足です。お弁当は何がはいっているかな〜というお話ではじまります。おにぎりになったり, たまご焼きやエビフライ, プチトマトになったり, お弁当に入っているものを表現します。最後はテルテルボウズの踊りをリズムにのって元気に踊ります。子どもたちのかわいい表現や踊りをみてやってください。		入場門
	音楽①(3分10秒)	スキップで入場門から入場。園庭に広がる。	子どもの先頭。スキップで園庭を回る。
あしたはえんそく	「あしたはいよいよ遠足です。晴れるといいですね」 「お弁当, 何がはいっているかな〜?」 「みんなでお弁当をつくってみましょう。」	グループに分かれて丸くなって座る 大きな声で「おにぎり」	*子どものなかに座り動きを見る
あつあつのごはん	「あつあつのごはん ふーふー」 「お塩を ぱっぱっぱ」 「さあ作ってみましょう」 「ぎゅっ ぎゅっ ぎゅっ」	座ったままあつあつのご飯になって, お塩をかけてもらうのを待つ。 保育者のスキップに合わせて, 一緒にスキップする子どもが1名。	グループの周りをスキップしながら, 「お塩をパッパッ」の動作をする。
三角おにぎり 丸おにぎり 大きなおにぎり	「みんな立ちましょう」 「三角 おにぎり ぎゅっ」 「まるい おにぎり ぎゅっ」 「今度は大きな大きなおにぎり ぎゅっ」	全員立つが, 座ったままで, おにぎりの動作をする子ども1名。腕を頭の上でのばして「ぎゅ」 頭の上で腕を使って丸く, 頭を抱えるような動きも。 手を横に広げる表現。手を上に上げる表現。 三角・丸・大きいという表現の違いよりも, 「ぎゅ」という言葉のリズムに動作を合わせることが優先されている。	*子どものなかに座り動きを見る
二人でぎゅー ・背中で ・おしりで	「今度は二人組ですよ」 「二人でぎゅっ ぎゅっ」 「お手手でぎゅっ ぎゅっ」 「肩でぎゅっ ぎゅっ」 「今度は背中で ぎゅー」 「最後はおしりで ぎゅー」	向かい合って手で押し合う。 二人組みにならないでおなかを出して歩いている子ども1名。身体の部分の違いを感じるといよりは, 後ろ向きに押すことを楽しんでいる。	*子どものなかに座り動きを見る

運動会における表現遊びの実践

<p>たまご焼き ・たまごを割る「コンコン、パカ」 ・たまごがツルン ・混ぜる ・フライパンにジュー ・くるくる</p>	<p>「えーっと それから」 「ばら組さん割るよ。コンコン、パカ」 「今度はもも組さん割るよ。コンコン、パカ」 「たまごが つるん」 「たまご混ぜるよー、シャカシャカシャカシャカシャカシャカ……」 「今度はフライパンにたまごをいれて、フライパンがジュー」 「たまごを巻くよ。まきまき…」 「これでたまご焼きのできあがり」</p>	<p>子ども「たまご焼き」リズムに合わせて「コンコン、パカ」でリズムに合わせる。流れ落ちる部分であったが、座り込む動き。園庭を走り回り、ジューで身体をのぼして止まる。立ってくるくる回る</p>	<p>* 子どものなかに座り動きを見る</p>
<p>エビフライ たこウインナー ほうれんそう プチトマト ウサギリんご (きゅうりは省略)</p>	<p>「他に何入っているかな」 「もも組さんの好きなエビフライ。しっぽがぴん」 「ばら組さんの好きなたこウインナー。 によろんによろん」 「もも組さんの元気がでるほうれんそう。 モーリモーリ」 「次はばら組さんの真っ赤なプチトマト」 「最後はみんなでウサギリんご」 「おいしお弁当できたね～。 あした楽しみだね～」</p>	<p>「エビフライ」のポーズ 手を前に身体を少し曲げる 「たこ」の表現 手を大きく振り上げながら走り回る 「もり もり」腕をまげてモリモリ 頭をプチプチと軽くたたきながら走る ウサギの表現</p>	<p>* 子どものなかに座り動きを見る</p>
	<p>「スキップで行こうか」</p>		
<p>「あれ お空が暗くなってきたよあめかな～」</p>	<p>音楽② 「あれ お空が暗くなってきたよ」 「よーし、テルテルポーズにお願いしよう！」</p>	<p>保育者が演じている周りに集まるが、手を横に広げ雨が降ってきそうという自由表現は少なかった。</p>	<p>空を見上げながら不安げな表情 不安げな身振り</p>
<p>テルテルボウズのダンス</p>	<p>音楽③</p>	<p>曲が始まるとクラスの位置に付き、保育者が来るのを待つ。 1番を踊る ランニング わーい 左右にゆれる おまかせ 右へゆれながらしゃがむ 左へゆれながらしゃがむ おしりを小さく振る 手を大きく振る 回る わーい ゆれる おまかせ ラストポーズ 間奏の間に隊形移動 2番を踊る</p>	<p>テルテルボウズの人形を持ち、位置に付く</p>
	<p>「いい天気になってよかったね。」</p>		

体的に内容を見ていきたい。

① 作品原案のストーリーを短くアレンジする

原案では、お弁当の材料を作り、お弁当につめていくというストーリーであったが、このお弁当の内容については省かれ、「エビフライ」と「たこウインナー」、「ほうれん草」と「プチトマト」をそれぞれの組で交互に演じることが割り当てられた。お弁当の材料をイメージしながら、動きのバリエーションを楽しむことを大切にしようアレンジされていた。

② 原案のこたばを用いながらテンポよい言葉のリズムを用いる

おにぎりの表現で、「三角おにぎり、ぎゅう」「まるいおにぎり、ぎゅう」「こんどは大きなおにぎり、ぎゅう」とテンポのよい言葉のリズムで表現するように工夫されていた。原案では三角やまるいおにぎりの動きを確かめ合うように進めるものであったが、テンポよく進めるように配慮されたところである。

「最後はみんなでウサギリーんーご」と、切りよく終わることばのリズムをみんなで揃ってしめくくる表現がされていた。BGMの楽曲のリズムではなく、ナレーションで使用される言葉のリズムが作品進行の重要な役割を果たしていた。

③ 個としての表現を十分に楽しむ工夫をする

原案では、おにぎりの表現で、三角おにぎり、まるいおにぎりは個人の動きで表現し、大きなおにぎりはグループごとに形作ることを考えたが、K幼稚園では、三角、まる、大きなおにぎりを一人ひとりの動きで表現し、その後、「今度はふたり組みですよ」というナレーションによって、ふたり組みになり、向かい合って押し合う、あるいは背中合わせで肩・背中・おしりで押し合うという展開であった。

原案では4～5人のグループでおにぎりという同じイメージを共有しながらの表現を提案したが、一人て表現することに重点が置かれていたのも、K幼稚園ならではの表現の楽しみ方ともいえよう。

たまごを割ると中からたまごが出てくる表現のところは、「ばら組さん、割るよ。コンコン、パカ」「今度は、もも組さん、割るよ。コンコン、パカ」と、クラスの名称で呼ばれた子どもたちが立って表現し、もうひとつのクラスの子どもたちがそれを座って見るという方法で、交互に行われた。クラスの所属意識をもちながら表現したい思いをクラスのなかの一人としてそれぞれの形で表現し、お互いの表現を見せ合う部分であった。

(2) 4歳児の表現遊びの動きの特性

4歳児の表現遊びで提案した動きの妥当性を検討するために、後半のリズムダンスの動きの完成度を各フレーズで用いた動きの種類ごとに評価を行った。記録のVTRから、元の動きの完成度、一致度を総合的に10段階で評価した。評価得点は、筆者2名によるVTRを3回視聴しての10段階で評価をおこない、それぞれの動きの単位ごとに平均点を示した(Table 2)。「しゃがむ」「まわる」など全身をリズムにあわせる動作の完成度は個人差が見られ、「左右にゆれる」「揺れる」など胴体を動かして表現する動作はまだ難しさがあるようである。しかし、明確な動きではないけれどもリズムのある動きを感じ取ることが出来た。そして未完成的な動きながら周りの子どもたちと心地よい感覚を共有しているようであった。

評価得点の高かった動き、つまり、リズムにあわせて動きも伴っていたところは「おまかせー」と「わーい」の動きであった。「おまかせー」の動きは片手の握りこぶしを胸にトンとあてた後、親指を立てながら腕を伸ばすという動作であるが、この部分の完成度、一致度が共に高く、最後のきめポーズとして、表情豊かに気持ちのこもった表現をしていた。「わーい」の動きは両腕を身体の前で回す動きであるが、評価得点が高かった。全体の動きを比較してみると、手や腕を使う表現についての再生率が高いといえる。

動きの完成度についていえば十分再生されたとはいえないが、新たな動きの体験を得るための動きの種類としてはほぼ妥当であったと思われる。特に幼児の場合、身体の方向性と、動きのリズムを感じながら、友達と協力して動きをあわせることが重要な要素であると感じた。例えば、一人でおにぎりの表現をしたあと、二人組みで、手で押し合ったり、後ろ向きに押し合う動きは「ぎゅう」と表現したりするところは、子どもの身体の使い方に違和感のない動きになるよう配慮されたものである。二人で力を合わせないとうまく力を掛け合うことや、身体の部位を使い分けることはまだ難しいが、相手のリズムや呼吸を後ろ向きに感じながらふれあうことを楽しんでた。「ぎゅう」というリズムにあわせて力を加減することも必要で

あるが、まだ、押すことが面白くてお互いのリズムをコントロールすることが出来ないケースも多く見られた。

「あれ～お空が暗くなってきた」と思い思いに表現するところでは、保育者が左右の手を広げて見上げる動きをしていたが、同じような表現をする幼児は少なかった。手をかざし空を見てからくるくと回りながら表現を楽しむ子どもがいるが、長い時間ではなく一瞬の動きで終わってしまった。多くの子どもは、保育者が「雨かもしれない」と空を見上げながら動いている周りに集まってきて空を仰いでいる。生活の中で体験した動きから、徐々に演技的な動きの表現へと発展していく過渡期であると感じた。

(3) 運動場で演じることを考慮した工夫

・大きなテルテルボウズ

子どもたちがテルテルボウズになりきるための小道具として、大きなテルテルボウズを加えていた。ビニルの袋を活用した子どもの背丈を越える大きな作品である。もち手の長い棒をもちリズムに合わせると、テルテルボウズのすそがゆれる動きも楽しめ、列の先頭で保育者が持ち一緒に踊った(Fig. 2)。

・手袋

表現を助けるための道具として、白い帽子をかぶり、クラスごとに色分けした赤やピンクの手袋をはめた。手の表現を強調し、自身がテルテルボウズになりきって踊れるよう色の演出にも配慮されていた。

・園庭での動きの工夫

たまごを混ぜる動作は「シャカシャカシャカシャカ」というナレーションにあわせて、クラスごとにで分かれて座った位置から離れて、園庭を走り回りながら好きなところへ移動し、2つのクラスが入り混じるようになっていた。続いて、たまごを割る、たまごを流し込む動作については、園庭の砂の上であることに配慮して、身体をのばしてながれる様子をあらわし、たまごを巻く表現についても、「まきまきまきまき」というナレーションにあわせて、立って手を伸ばして回転する動作で表現していた。

・観客席を意識した見せるための表現

「テルテルボウズのダンス」の踊る方向は、各々のクラスが横一列になり、観客席に向かっていった(Fig.3)。園庭全体を表現の空間にすること、発表の方向を外周の保護者席にむけて踊ること、あるいは発表の位置を移動することなど、見る側を意識した形態であった。

K 幼稚園の運動会では、原案になる作品をもとにリズムカルに動きのパターンを楽しむことに重点を置いてアレンジされていた。そのポイントは、子どもの発想をいかした新たな動き、子どもの人数や場所に合わせた動き、子どもが動きやすい動きという点に配慮されたものであった。

4. 表現遊びにおける保育者の役割と援助

(1) 運動会での保育者の役割

運動会当日の保育者の援助の内容を見ると、模倣対象となる動きそのものを示す直接的援助と、子どもの表現を助ける動きつまり、補助的・補完的援助の仕方があった。

直接的援助として、ダンスなど、子どもたちと一緒にダンスをして動きを提示しながら子どもが模倣しやすくすることである。横に一列に並んでダンスをすると、友達と顔を見合わせたり、少し離れている保育者の方をみたりしながらダンスする子どもの様子がみられた。子どもが安心して楽しく踊るためにも保育

Table 2. リズムダンスに用いた動きの評価得点

リズムダンスの動きの種類	評価の平均得点
ランニング	6.8
わーい	9.3
左右にゆれる	4.8
おまかせ	9.8
右へゆれながらしゃがむ	7.0
左へゆれながらしゃがむ	7.0
おしりを小さく振る	6.3
手を大きく振る	8.8
ぐるっと回る	8.0
わーい	9.3
ゆれる	5.5
おまかせ	9.5
ラストポーズ	10.0



Fig. 2. テルテルボウズ



Fig. 3. 発表を工夫したダンス

者の存在が重要である。直接援助のもうひとつの役割として、子どもの動きを先導し、動きの方向性や位置を示すことがあげられる。楽曲にあわせて隊形移動をする場合まだ子どもたちだけで移動することは困難であり、保育者の手助けが必要になる。また今回は、テルテルボウズが先導役の一端を担っていた。

補助的・補完的援助の例としては、保育者があつあつのご飯になりきっている子どもたちの間をスキップしながら、塩をかける動作をしていた。子どもの表現と対照的な役割をすることで、子どもの表現を際立てることができる。また補助的・補完的役割として、ナレーションの果たす役割は大きい。「お弁当は何かはいつているかな～」の問いかけに対して、子どもが「おにぎり」と答える。ナレーションが「えーっとそれから」と問いかけると、子どもたちが「たまご焼き」と答えるなどの言語的応答場面は、運動会のなかでも楽しくいかされていた。ナレーションは、状況を説明する、動きのリズムを与える、子ども役割を明確に指示する、場面を切り替える、など、表現の内容に即したことばで、タイミングよく用いることが求められる。

(2) 日常保育中の援助

実践者である保育者は運動会までの保育を振り返り、「子ども達にどのようにおろしていくか同じ年少クラスの先生と検討し、自由に子どもが表現した動きを組み込んでいこうということになった。卵焼きの動きは子どもから出てきた動きを取り入れたが、自由表現を取り入れようとしても、自由に表現するまでは至らなかった。」と述べ、創造的な動きを求めることは難しかったことを述べている。創造的な動きが現れても表現の持続時間が短く、ストーリー性のある自発的な動きに発展することは期待しにくい。子どものアイデアを生かした動きを取り入れようと、保育者が無理に引き出そうとしてもなかなか生まれてくるものでもなく、子どもの自由に任せるだけでは、身体を動かす楽しさは半減する。

「実際に行ってみると一緒に動く教師と同じような動きをする子どもが多く、しだいに目標を、『体を動かす、表現することを楽しむこと』へと変えていった。」と述べている。身体を使った表現遊びのなかでからだを通してともにある感覚を楽しむことこそ大変重要な意味を持つ。

表現遊びの体験が日常生活のなかでの新たな気づきに結びついたエピソードもある。運動会を間近に控えていたとき、表現遊びの経験を通して、お弁当の時間に自分のお弁当を見て「三角おにぎりやな～」とか、「見て！たこウィンナー！」と友だちと見せ合う姿や、降園時に天気が曇りだったのを見て「雨ふりそうや！テルテルボウズの踊り踊ろうよ！」と子ども達が提案したことなど、表現遊びの経験が生活にあらわれていたようである。

5. まとめ

子どもの身近な生活のなかにあるものや事柄を題材に、表現遊びの作品の創作を試み、実践による検討

を行った。

幼児が、表現遊び「あした 天気にな～れ」を体験することで、身体の部分を意識化するという運動・身体的経験、友達や保育者の動きの模倣をし、言葉のイメージを動きにするという表現的经验、友達と協力して一緒に動きを作るという関係的经验において有効であったと考えられる。音楽や言葉のリズムにあわせて、テンポよく動作を楽しむこと、保育者が言葉を掛け、子どもたちが自発的に自由な表現をすることについては積極的な関心が示されていた。講習会で提案された表現遊びの構成および音楽を利用し、見栄えをよくした作品発表であった。身体表現では、集団がどのようなものであるかが重要な要素(古市2007)³⁾であるが、1人、2人組み、グループ、クラス、2クラス合同などで表現する人数にも工夫されていた。

年少児にとっては、幼稚園で初めて体験する運動会である。発表することについて楽しみや期待もあろうが、広い場所で、見ている人がいるという非日常的な環境での表現体験は負担を感じることもあっただろう。運動会は、新しい身体表現の運動体験、友だちとのかかわりの体験などを通して新たな経験を得る機会であってほしい。身体表現の遊びのなかで経験したことを、生活の場面で再現するなど、経験を深化していることも確認されたように、運動会までの過程のなかで、何度も表現することを繰り返して動きを身に付けていきながら、一つの形あるものに作り上げていくプロセスも大切にしたい。

表現遊びを形あるものにしていくためには、保育者が子どもの活動に対する予測と展開をあらかじめ準備しておくが必要になる。保育者の動きのヒントになるような言葉かけを手がかりに、子どもが思い描くことを引き出していくこととともに、動きたくなる動きを保育者と一緒に楽しむことも考慮しておきたい。自由な表現を求めようとして保育者が身体で動きを提示すると、動きの模倣になってしまう難しさがあったが、これは幼児にとって、保育者の動きが動きたくなる重要な拠所であることを示しているし、保育者と一緒に動くということを幼児が求めていると思われる。須永(2007)⁴⁾は、身体の動きを相手と合わせていくことにより興奮が高まり、相手との快の情動を共有することができると述べているが、周りの子どもや保育者と共に動くことでお互い楽しさが通じるのであり、保育者が一緒に動きを示している意味は大きい。子どもが模倣して楽しむことも、創造的な動きを楽しむことも幼児の大切な身体表現の活動である。身体を動かし、共にあることを楽しむことを大切にしたい。

身体表現活動では、保育者にとっては、子どもの創造的な動きをどのように生かしていけばよいのか、それをどのように受け止め広げていってよいかなど、指導する上での大きな悩みをもっている(2006 遠藤)⁵⁾。音楽や動きの題材を含む教材の内容の検討を深め、今後も子どもの身体表現活動を支えるための原本となる日常の保育にいかせる身体表現遊びの内容について具体的に提示していきたい。

文 献

- 1) 増原喜代・川村晴子 2003 家庭における子どもの運動遊び ―運動会行事の持つ意味― 保育学会誌 P.550-551.
- 2) 遠藤 晶・花木沙織 2005 幼児の表現遊びのための運動会作品 ～運動会における発表と日常の保育にいきる題材をめざして～ 日本保育学会第59回大会研究論文集, 262-263.
- 3) 古市久子 2007 児童心理学の進歩 日本児童研究所編集 金子書房
- 4) 須永 美紀 2007 「共振」から「共感」へ 佐伯 胖編 共感―育ち合う保育のなかで ミネルヴァ書房
- 5) 遠藤 晶 2006: 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について ―身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して 武庫川女子大紀要 人文・社会科学 54, 91-99.